

早稲田大学 教育学研究科
修士課程 入試問題の訂正内容

<2021年度 外国学生入試・国語教育専攻>

【専門科目】

●問題冊子5ページ : 見出し

(誤)

修士課程 一般入学試験問題[専門科目・共通]

(正)

修士課程 一般・外国学生入学試験問題[専門科目・選択]

●問題冊子7ページ : 選択六 二、(5)

(誤)

(5)上田秋成『雨月物語』の概要と展開について述べよ。

(正)

(5)上田秋成『雨月物語』の概要と特徴について述べよ。

以上

二〇二一年度 早稲田大学大学院教育学研究科 修士課程 外国学生入学試験問題〔専門科目〕【国語教育専攻】

解答上の注意

- 一、国語教育専攻の入学試験問題は、〔専門科目・選択〕（配点60％）と〔専門科目・共通〕（配点40％）とに分かれています。
- ①「専門科目・選択」は、出願時に届け出た研究指導・指導教員の専門分野により、左記の表の「解答すべき問題」（選択一～選択八）を解答しなさい。なお、「解答すべき問題」以外を解答した場合、当該解答は「0点」となります。

志願票に記入した 研究指導名	志願票に記入した 指導希望教員名	「専門科目・選択」で 解答すべき問題
国語科教育研究指導	幸田 国広	選択一 国語教育
日本語学研究指導	松本 正恵	選択二 日本語学（日本語教育を含む）
国文学研究指導	松本 直樹	選択三 古典文学 I 上代文学
国文学研究指導	新美 哲彦	選択四 古典文学 II 中古文学
国文学研究指導	福家 俊幸	選択五 古典文学 III 中世文学
国文学研究指導	大津 雄一	選択六 古典文学 IV 近世文学
国文学研究指導	田淵 句美子	選択七 中国古典文学
国文学研究指導	中嶋 隆	選択八 近代文学
国文学研究指導	内山 精也	
国文学研究指導	堀 誠	
国文学研究指導	石原 千秋	
国文学研究指導	金井 景子	
国文学研究指導	五味渕 典嗣	
国文学研究指導	和田 敦彦	

②「専門科目・共通」は、出願時に届け出た研究指導・指導教員の専門分野により、左記の表の「解答すべき問題」（共通A～Dのいずれか一問）を解答しなさい。なお、「解答すべき問題」以外を解答した場合、当該解答は「0点」となります。

志願票に記入した 研究指導名	志願票に記入した 指導希望教員名	「専門科目・共通」で 解答すべき問題
日本語学研究指導	松本 正恵	共通A 日本語学（日本語教育を含む）
国文学研究指導	内山 精也	共通B 中国古典文学
国文学研究指導	石原 千秋	共通C 近代文学
国文学研究指導	五味渕 典嗣	共通D 近代文学

- 二、解答用紙は、「問題番号」ごとに一枚使用すること。全ての解答用紙の所定欄に、受験番号・氏名・研究指導名・指導教員名、ならびに「問題番号」（例「選択八」・「共通A」など）を必ず記入すること。
- 三、解答用紙のホッチキスは、はずさないこと。また、無解答の解答用紙でも提出すること。
- 四、問題用紙は「十六枚」（本ページ含む）、解答用紙は「二枚」です。必ず枚数を確認すること。

二〇二二年度 早稲田大学大学院教育学研究科
修士課程 一般・外国学生入学試験問題
【専門科目・選択】 【国語教育専攻】

「選択一」 国語教育

※解答に際しては選択した問題番号を明記すること。

一、次のA～Hのうちから三題を選び、それぞれ簡潔に説明しなさい。

- | | |
|---------------|------------------|
| A 「サクラ」読本 | B 国際バカロレア |
| C 言葉による見方・考え方 | D 随意選題論争 |
| E 国語国字問題 | F 情報の扱い方に関する事項 |
| G コンポジション理論 | H リーディング・ワークシヨップ |

二、次のI～Nのうちから二題を選び、具体的に解説しなさい。

- | |
|------------------------------------|
| I 大村はまの国語単元学習における学習記録の位置づけ |
| J 平成二九・三〇年版学習指導要領における指導事項と言語活動例の関係 |
| K 西尾実の鑑賞理論の特徴 |
| L 荒木繁の古典教育論の特徴 |
| M 「総合的な探究の時間」と国語科の役割 |
| N 評価規準と評価基準の違い |

三、「読むこと」領域が、従来「構造と内容の把握」「精査・解釈」の指導に偏り、「考
えの形成」に十分な手当が行われてこなかったと言われている。近年、学習者の読む能
力の育成において、「考えの形成」が特に重視されようになったのはなぜだと考えられ
るか。また、「考えの形成」に重点を置いた単元指導計画や教材の扱い方には、どのよ
うな工夫が必要だろうか。あなたの考えを述べなさい。

二〇二一年度 早稲田大学大学院教育学研究科
修士課程 一般・外国学生入学試験問題
「専門科目・選択」 【国語教育専攻】

〔選択二〕 日本語学

一次のA～Lの事項のうちから四題を選び、説明しなさい。

- | | | | | | |
|---|-------|---|----------|---|-----------|
| A | オノマトペ | B | 記録体（東鏡体） | C | 二段活用的一段化 |
| D | 語用論 | E | 『蜺縮涼鼓集』 | F | 特殊音素（特殊拍） |
| G | 待遇表現 | H | モダリティ | I | 計量言語学 |
| J | 山田孝雄 | K | 改定常用漢字表 | L | ロール・プレイ |

二次のM～Oのうちから一題を選び、具体的に論じなさい。

- M 単語の語構成のバリエーションと分類上の問題点
N 「主格」・「主語」・「主題」の違い（術語の位置づけと研究方法の違い）
O 古代語・現代語従属節の種類とその階層性

三 日本語学が研究対象としている範囲・分野について、専門外の人にもわかりやすいように、具体例を交えながら説明しなさい。その際、研究方法や隣接領域にも触れ、日本語学研究の意義が明確になるように論じなさい。

二〇二一年度 早稲田大学大学院教育学研究科
修士課程 一般・外国学生入学試験問題
「専門科目・選択」 【国語教育専攻】

〔選択三〕 古典文学（I） 上代文学問題

一、次の（A）～（D）のうちから、二題を選択して論述しなさい。解答の際には、選択した問題番号を明記すること。

- （A）古代日本の建国神話
- （B）「古老相伝旧聞異事」
- （C）記紀歌謡
- （D）万葉宮廷歌人

二、次の（E）～（K）のうちから、三題を選択して簡潔に（一題あたり解答用紙五行以内）説明しなさい。解答の際には、選択した問題番号を明記すること。

- | | | | |
|--------------|--------|-------------|-------------|
| （E）ハイスヴェレ型神話 | （F）大嘗祭 | （G）神功皇后 | （H）『万葉集』卷十四 |
| （I）浦島説話 | （J）歌垣歌 | （K）『出雲国風土記』 | |

三、上代文学作品の享受の歴史を踏まえ、それを研究することの意義と、志願者自身の研究方針、研究テーマについて具体的かつ簡潔に（解答用紙一〇行以内）述べなさい。

（上代文学問題 以上）

二〇二一年度 早稲田大学大学院教育学研究科

修士課程 一般入学試験問題

「専門科目・共通」 【国語教育専攻】

〔選択 四〕 古典文学（Ⅱ） 中古文学

解答に際しては選択した問題番号を明記すること。

一、次の(A)～(D)のうち、二題を選択して論述せよ。

- (A) 『伊勢物語』と在原業平
- (B) 『更級日記』と宮仕え体験
- (C) 『堤中納言物語』の成立
- (D) 『源氏物語』の諸本研究の意義

二、次の(E)～(M)のうち三題を選択して、簡潔に説明せよ。

- | | | |
|------------------|-------------|---------------|
| (E) 『落窪物語』 | (F) 『うつほ物語』 | (G) 『浜松中納言物語』 |
| (H) 『大鏡』 | (I) 『竹取物語』 | (J) 『蜻蛉日記』 |
| (K) 藤原定子 | (L) 漢文日記 | |
| (M) 平安時代の文学における帝 | | |

三、中古文学を学校教育で学ぶ意義とは何か、あなたの考えを述べよ。

二〇二二年度 早稲田大学大学院教育学研究科
修士課程 一般・外国学生入学試験問題

「専門科目・選択」 【国語教育専攻】

〔選択五〕 古典文学 (Ⅲ) 中世文学

一、次の①～⑧の中から二題を選択して、詳しく論述しなさい。

- ① 『平家物語』の成立状況について
- ② 軍記物語の基本的な物語構造について
- ③ 説話集の文学史的展開について
- ④ 室町時代の文芸の特徴について
- ⑤ 定数歌と題詠歌について
- ⑥ 物語と中世和歌について
- ⑦ 歌道家の歴史と役割について
- ⑧ 中世における宮廷女房文学について

二、次の①～⑩の中から三題を選択して、簡潔に説明しなさい。

- ① 源平盛衰記
- ② 徒然草
- ③ 曾我物語
- ④ 御伽草子
- ⑤ 風姿花伝
- ⑥ 近代秀歌
- ⑦ 無名草子
- ⑧ 新勅撰和歌集
- ⑨ 源氏物語歌合
- ⑩ 竹むきが記

二〇二二年度 早稲田大学大学院教育学研究科
修士課程 一般・外国学生入学試験問題
「専門科目・選択」 「国語教育専攻」

【選択六】 古典文学（Ⅳ） 近世文学

一、井原西鶴・松尾芭蕉・近松門左衛門・与謝蕪村・上田秋成・山東京伝・滝沢馬琴の中から、一人を選び、その文芸の特徴と文学史上の位置について、自由に論じなさい。

二、次の（１）～（６）の中から一題を選択し、論述しなさい。

- （１） 鈴木正三『片仮名本 因果物語』の概要と特徴について述べよ。
- （２） 井原西鶴『世間胸算用』の概要と特徴について述べよ。
- （３） 近松門左衛門『曾根崎心中』の概要と特徴について述べよ。
- （４） 芭蕉七部集の概要と俳風の展開について述べよ。
- （５） 上田秋成『雨月物語』の概要と展開について述べよ。
- （６） 滝沢馬琴『南総里見八犬伝』の概要と特徴について述べよ。

三、次の（７）～（１５）の中から三題を選択し、簡潔に説明せよ。

- | | | |
|--------------|------------|-------------|
| （７） 好色一代男 | （８） 武道伝来記 | （９） 元禄大平記 |
| （１０） 遊子方言 | （１１） 椿説弓張月 | （１２） 春色梅児誉美 |
| （１３） 金々先生栄花夢 | （１４） 高尾船字文 | （１５） 女殺油地獄 |

二〇二一年度 早稲田大学大学院教育学研究科
修士課程 一般・外国学生入学試験問題
「専門科目・選択」 【国語教育専攻】

〔選択七〕 中国古典文学 問題

〔一〕 王羲之「蘭亭序」の一節である。これを読んで、設問に答えなさい。

永和九年、歲在癸丑、暮春之初、會于會稽山陰之蘭亭、脩禊事也。羣賢畢至、少長咸集。此地有崇山峻嶺、茂林脩竹。又有清流激湍、映帶左右。引以爲流觴曲水、列坐其次。雖無絲竹管弦之盛、一觴一詠、亦足以暢敘幽情。是日也、天朗氣清、惠風和暢、仰觀宇宙之大、俯察品類之盛、所以遊目騁懷、足以極視聽之娛、信可樂也。夫人之相與俯仰一世、或取諸懷抱、悟言一室之內、或因寄所託、放浪形骸之外。雖趣舍萬殊、靜躁不同、當其欣於所遇、暫得於己、快然自足、不知老之將至。及其所之既倦、情隨事遷、感慨係之矣。向之所欣、俛仰之間、以爲陳迹、猶不能不以之興懷。……

〔設問一〕 傍線①「脩禊事」について、簡潔に説明しなさい。

〔設問二〕 傍線②「所以……之娛」を書き下し文にするか、現代中国語の発音記号（ピンイン）で書くか、いずれか一つを選んで答えよ。

〔設問三〕 傍線③「雖趣……興懷」を和訳せよ。

〔設問四〕 作者・王羲之について知るところを記せ。

〔二〕 次のア～オの中から一つを選択し、その記号を解答欄に記した上で、説明ならびにあなたの考えを記しなさい。

ア 「小説」という語の、中国古代の伝統的意味と現代的意味の相違について

イ 「新楽府」について

ウ 中国の女性詩人について

エ 日中比較文学の研究方法について

オ 現在の漢文教育の問題点について

〔三〕 次の（A）～（J）の中から三つの項目を選び、それぞれの文学史ないしは文化史的意味を中心に説明しなさい。

- | | | |
|-----------|----------|---------------|
| （A）「漁父の辞」 | （B）指事文字 | （C）「典論論文」 |
| （D）「桃花源記」 | （E）李絶杜律 | （F）「念奴嬌 赤壁懷古」 |
| （G）『紅樓夢』 | （H）『懷風藻』 | （I）李攀龍『唐詩選』 |
| （J）魯迅「故郷」 | | |

二〇二一年度 早稲田大学大学院教育学研究科
修士課程 一般・外国学生入学試験問題
「専門科目・選択」 「国語教育専攻」

「選択Ⅷ 近代文学」

一 日本の近代文学の文体について、あなたの考えるところを述べなさい。

二次の(A)～(E)の中から一題を選択して論じなさい。

- (A) 政治小説について
- (B) 硯友社の文学について
- (C) 大逆事件と文学について
- (D) 「小説の筋」論争について
- (E) ポスト・コロニアリズムと文学研究について

三 次の(A)～(G)の中から三題を選択して説明しなさい。
(「」は作品名、『』は雑誌名を示す)

- (A) 「当世書生気質」
- (B) 「武蔵野」
- (C) 田村俊子
- (D) 石川啄木
- (E) 『国民之友』
- (F) 『赤い鳥』
- (G) 「中タ・セクスアリス」

二〇二一年度 早稲田大学大学院教育学研究科 修士課程 外国学生入学試験問題 【専門科目・共通】 【国語教育専攻】

【共通A】 日本語学（含日本語教育） 松木正恵

次の文章は、三上章が一九六九（昭和四四）年一月に『月刊文法』に掲載した「補語としての主語」という論文の一部である。（本文は、『三上章論文集』（くろしお出版 一九七五年）から引用している。）この文章を読んで、後の問いに答えなさい。

一 新旧の主語否定論

最近、湯川恭敏氏（東大言語学助手）は日本語における「主語」の否定論を発表された。（『主語』に関する考察、『言語研究』五一号、昭和四二年三月。「日本語と『主語』」、「ことばの宇宙」昭和四二年九月。「日本語に主語はあるか」、本誌四四年一月号）

……意識、さらには言語においても、「主体」は、動作の対象や手段とかいったものよりも重要な地位を占めるのは当然であるということが導き出される。言語の「独自性」からは、こうした「主体」は、言語においては他のもの（動作の対象とか手段とか）より何らかの形で強い地位を占めていなければならないのであって、それを「述語」に対立する「主語」として固定化するか、あるいは対象とか手段をあらわす言語形式とほぼ同等の資格を与えながら、相対的には強い地位を占めさせるかは、いわば言語の側の自由であるということが導き出される。

日本語はこの後者（あるいは以下）の側の言語であり、日本語の「主語」は、他の連用修飾形式とほぼ同様の、文の構成上不可欠ではないものであり、連用修飾形式との間に本質的な違いがないと、湯川氏は結論される。もちろんいくつかの理由を数えられるのであるが、うち一つだけを取り上げれば、「主語」を表わす方法が多いことである。

彼ハ知ッテイマス 彼ガ知ッテイマス 彼モ知ッテイマス
彼デモ知ッテイマス 彼サエ知ッテイマス 彼マデ知ッテイマス

それに口語的な助詞なしの「ボク行キマス」のようなものを加えると、ここにあげただけでも七種類になる。

文が「主語」＋「述語」という形で構成されているとするなら、極めて明確に「主語」、「述語」をあらわす徴表がなくてはならないはずであるのに、その一方の「主語」がこのように極めて多くの形であらわされるというのはひどく奇妙なことである。もし、言語学者や国語学者が、この事実だけでも真剣に考慮していたなら、当然、日本語の文には「主語」があるという考えに疑問を抱くに至ったはずなのである。（同上）

道筋こそ違え、「主語」に疑問をいだいた者も三人や四人ではなかった。そういうひとりとして、わたしは湯川氏の論旨にたいたい賛成である。が、もちろん反対の人もあるだろう。主語の否定肯定の論議は早急には決着しないかもしれない、という気が最近ではしている。

あるいは肯定論が正しいと決まる場合でも、こちら側に捨て石的な役割は果たせると思う。論議の過程のうちに、日本文法の基礎が明らかにされるだろうからである。主語問題自身、そういう性格のものだと思う。

わたしの主語否定処女小論は、湯川氏のちょうど四半世紀前である。このように新旧類似の否定論があらわれたこと自体、ともかくこの問題が論議に値することを示すものといえないだろうか。湯川氏はもちろん、拙論とは無関係独自に立論されたのである。拙論も発表当時は、他と無関係な自分だけの考えのつもりであった。しかし、そうではなかった。①時枝文法の主語否定論（！）は拙論より少し前であり、論旨もいっそうきびしいのである。「主語」という名目が残されているために目立たないが、主語は述語と対立するものではなくて、述語から抽出されたもの、ということでは、「主語」もまったく骨抜きである。

わたしは、「主語」をそれほど骨抜きにはしない。ということを示すために、旧著『現代語法序説』（昭和二八年）にあげた主格の相対的優位五個条をここに引用したい。

- 一 主格はほとんどあらゆる用言に係るが、他の格は狭く限られている。
- 二 命令文で振り落とされる。
- 三 受身は主格を軸とする変換である。
- 四 敬語法で最上位に立つ。
- 五 用言の形式化に最も強く抵抗する。

わたし自身は、第一条よりも第五条を重視している。形式化（副詞化）に対する抵抗の強さしだいでは、「相対的」優位にとどまらなくなるかもしれない。その点の反省は絶えずしているのである。

『コトバ』（昭和一七年六月）に発表の拙論は、そろそろ一世代に近い過去である。以後、研究者の年代層もかなり移動しているはずである。わたし自身も回顧して進みたいし、主語問題特に若い読者に討究していただきたいために、次節に拙論のほんの要旨を述べる。

なお、以下に使う「補語」はフランス文法の補語に近い。ただし、フランス文法の補語から狭義の修飾語（名詞を含まぬもの）を差し引いた残りである。そこでは、直接目的「を」や間接目的「に」などを補語と呼ぶのであるが、それを主格「が」にまで拡張しようとするのである。

二〇二一年度 早稲田大学大学院教育学研究科 修士課程 外国学生入学試験問題 【専門科目・共通】 【国語教育専攻】

二 わが処女小論要旨

われわれのことばづかいは、静的に一つの意味を表わしつつ、動的に話し手と聞き手とを結びつけるものである。だから、センテンスも二つの成分の総合というふうに見るのが便利だと思う。二つのうち、静的要素のほうを不定法部分と称し、動的要素を「決まり」と名づける。用語の説明は実例についてやってゆく。主の字を頂いているのは主語だが、センテンスのほんとうの主役は述語、すなわち用言のほうだろう。用言では語幹が観念を表わし、活用語尾が陳述作用を受け持つ。いま、活用停止の形、たとえば *to lend* を取り上げる。この動詞の観念を充足する (*to complete*) ために補語 (*complement*) を追加すると、

to lend someone something

となって、一つの不定法単位ができてあがる。このいわば画竜が *He did* という「決まり」で点晴されて生動するに至る過程を番号で示そう。源太、平次両君に登場してもらう。

- 0) (*to*) *lend someone something* _____
- 1) *He (= Genta) did + lend someone something*
- 2) *Genta lent someone something*
- 3) *Genta lent Heizi something*
- 4) *Genta lent Heizi a book*

この *He did* という「決まり」が主語・述語であって、決まりと不定法単位とは *did + lend* として接触し化合する。そして切れるときにもこのところで切れる。打消や疑問文を作る際、*lent* から *did* が還元されるぐあいを見ていただきたい。

わが国語の動詞には独立した不定法の形がない。一段活用の弱変化動詞はまだよいが、五段活用の強変化動詞から活用語尾を除くと、子音止まりで発音も困難な語幹が残る。漢字を使って「ダレカガダレカニ何カヲ貸」で止めれば、さっきの英語の不定法単位に似たものが得られる。そして、「決まり」としては用言に「歩け」と指令するだけで十分で、以下点晴生動の順序を示すと、

- 一 ダレカガダレカニ何カヲ貸シタ
- 二 ダレカガダレカニ本ヲ貸シタ
- 三 ダレカガ平次ニ本ヲ貸シタ
- 四 源太ガ平次ニ本ヲ貸シタ

であって、主語・述語という複式の決まりに従ってはいない。センテンスとしては、述部一本建ての単式な組み立てになっているものと見たい。もっとも、これは事実をすなおに述べる「物語り文」についていうのである。代表的には、歴史年表中の記事がすべてこの式になっている。提題助詞「ハ」が典型的に現われる場合、すなわち「品定め文」においては少し事情が違うが、この辺で独断を下しておけば、「源太ガ」は主語ではなくて、主格補語とでも呼ぶべき資格のものだ。

センテンス中に現われる体言を、どうして、主語と補語との二階級に峻別するか。ヨーロッパ語のたてまえでは、動詞の活用語尾に干渉する体言と干渉しない体言との区別である。これは、いわゆる人称語尾のことである。近代英語や漢文では用言の前にくる体言とあとにくる体言との区別である。しかるにわが国語では

活用にも語順にもこういう遮断が求められない。「第一条、主語は述語に先立つ」「第二条、補語は動詞に先立つ」と書き分けてあっても、実は一括して、体言が用言に先立つというにすぎない。これが「何々が」を主語とみなしにくい消極的理由である。

主語否認の積極的理由は、心理的順序として「何々が」も用言に対してあとから補い加えるものだからである。「ワタシガヤッタ」という文を正直に英訳すれば、*It's me (or I) that did it*。ともしなくてはなるまいが、このように英文でさえ「ワタシ」をいわゆる補語の位置にもってくるのを見れば、思い半ばをすぎよう。(要旨終わり)

最後に使った例はやや極端であったが、「何々が」をあとから補い加えるものと見た点は、次節の国広氏の見解に通じる。

それから山田文法の一長一短に言及している。一長というのは、『日本文法講義』(四五五ページ)にあるもので、そこには例の「象は体大なり」「この人は年老いたり」等のいわゆる「二重主格」の次に「二重補格」の文例があげてある。

人つく牛をば角をきり、人くふ馬をば耳をきる。
罪重き者をば首を斬る。

河内と大和との境に金剛山といふ処に城をかまへて。

一枝を折る者は一指を斬らむ。

そして「従来この全と分との関係を主格にのみ認め、その本主格をば総主格などいへり。然れどもこれは主格にのみ存するにあらぬこと上の例にても見らるべく……」と書いている。これはかなり重要な指摘だと思うが、祖述されることが非常に少ないように思う。「象は鼻が長い」はよく問題になるが、同時に「ガスは元せんをしめておけ」に言及されることが非常に少ない。なお、わたしが「主語」を「主格」と改称している点は、山田の用語法の踏襲になっている。

一短というのは『日本口語法講義』(三五三ページ)にある。そこには語位転倒の場合が示されており、次のように「補格を主格の上に持ち来したものの」も転倒とみなされている。

この山には栗の木がたくさんあります。

土の中からお金や宝物がたくさん出ました。

私どもには娘が八人ございました。

これらはすべて、このままのほうがむしろ自然語順だろう。山田にさえ、「主格先頭」という先入見があったらしいことがわかる。主格は概して先頭に立つが、いつもそうとは決まらない。不特定なモノの所有、存在、出現を表わす文では、右の諸例のように先頭から二番目の位置にくるのが普通だろう。

三 山田文法の遺産

英語学者のほうからも主語否定論が出ている。長谷川欣佑氏は『日本文法試論』(「橋大学『言語文化』創刊号、昭和三九年」)の初めのほうで、次のように主語を否定しておられる。

日本語においても英語と同様に「主語」「述語」という術語が用いられることがあるが、両者の関係は英語におけるように「外心的」(*exocentric*)ではなく、「内心的」(*endocentric*)であり、*boku ga hon o jomu* [ボクガ本ヲ読ム]において、

二〇二一年度 早稲田大学大学院教育学研究科
修士課程 外国学生入学試験問題
【専門科目・共通】
【国語教育専攻】

boku ga は、hon o と同様になくてもよく、jomu に対して一種の修飾部を構成する。(中略)このことから上の連鎖の直接成分は boku ga jom / U であることがわかる。つまり日本語の「主語」boku ga は、hon o とパラレルに jom に吸収されるものである。

動詞語幹に吸収されるという言い方は巧妙である。わたしも今後使わせてもらうつもりである。さて長谷川氏は「主語」を廃し、「何々が」を predicate complement と呼ばれるのであるが、改称の理由は、(一)それが述語に対して不可欠の要素でないことを明示したためと、(二)それに「何々を」「何々に」などと同じ成分構造を与えておくことが便利だから、とされる。

わたしは、第二の理由をより重要と考える。たとえば、次のような受身文の作り方がある。

⑦ すりが彼の財布を盗んだ。 彼がすりに財布を盗まれた。
この場合、動詞が受身化されるとともに、格助詞に次のような変動が起こっている。

が ↓ に の ↓ が を → を (retained)

この語法を述べるにはどう言い表わしたらよいか。「甲が」「乙を」「丙に」などが「補語」の名で一括されていると、次のようにいえる。受身文を作る場合には、動詞に (r) be をつけるとともに、補語たちの格をしかじか入れ代える、といえはすむ。なんなら、主格を初めとして補語たちの格を、というふうにいってもよからう。「補語」という総括名があるほうを、わたしは便

利と感ずることが多いが、みなさんも「補語」がないほうの不便を感じたことはないだろうか。

国広哲弥氏は主語を否定されるのではないらしいが、近著『構造的意味論』(一四九ページ)に次のように書いておられる。

次に「動詞補語」というのは名詞にガ・オ・ニ・エ・ト・デ・カラ・マデという格助詞の付いたものである。

やはり主格の「が」がトップに置かれていることにご注意ください。これでは、主語「何々が」は補語の下位区分として存置されているにすぎず、内実は主語否定論に近いように思われるが、どうだろうか。

同書中の「日本語格助詞の意義素試論」から、「が」「の」「を」「に」の意義素だけを引用しよう。

「が」――心理的に先に存在する述語の主題を初出の觀念として補足的に示す。――補語的意義素

「の」――前接語に関係した。――形容詞的意義素

「を」――動作・作用の対象を示す。――補語的意義素

「に」――密着の対象を示す。――副詞的意義素

「が」の意義素中に使われている「主題」は、「主体」のほうがりやすい気がする。また、補語的意義素と副詞的意義素との違いも、わたしにはまだよくわからない。しかし、国広氏が格助詞を一括の扱いにされたことは重要であって、このことは、日本文法でとかく不問に付されがちの一問題への反省を呼び起こすものである。

△ 後略 ✓

問1 傍線部①の「時枝文法の主語否定論」とはどのような考えか。直後の波線部「主語は述語と対立するものではなくて、述語から抽出されたもの」という捉え方がわかるように、図示するなどして具体的に説明しなさい。

問2 傍線部②とは、敬語における主語のどのようなふるまい方を指すか。具体例を挙げてわかりやすく説明しなさい。

問3 英語と日本語における主語・述語の機能の違いを説明しているX・Yについて、どの部分がどのように異なるのか、具体例に基づいてわかりやすく説明しなさい。

問4 傍線部③・④とは、それぞれのどのような性質の文か説明しなさい。また、現代の日本語学では、③・④がそれぞれどのような名称で呼ばれているかについてもあわせて答えなさい。

問5 傍線部⑤・⑥について、それぞれに該当する単文例を自分で考えて一つずつ挙げなさい。(本文中に挙げられている例と同じ例文は不可。)

問6 傍線部⑦は、日本語の受身文の一つのタイプである。まず、このタイプの名称を挙げ、能動―受動交替の特徴を説明しなさい。その上で、このタイプ以外の日本語の受身文について、いくつかのタイプに分けて具体例とその特徴を説明しなさい。

問7 三上章のこの論文の主張をまとめなさい。

二〇二一年度 早稲田大学大学院教育学研究科
修士課程 外国学生入学試験問題
「専門科目・共通」 【国語教育専攻】

〔共通B〕 中国古典文学（内山 精也）

次の文章（石川忠久著『見南山』と『望南山』）を読み、後の問いに答えなさい。ただし、設問の都合上、一部、原文を省略したり表記を改めた箇所がある。

淵明詩中、最も人口に膾炙している「飲酒」其五の「悠然見南山」の句について、「見」が「望」になっているテキストがあり、由来その違いを論ずることが多い。……中略……始めに、当該詩を掲げておく。

飲酒 其五

結廬在人境 而無車馬喧
問君何能爾 心遠地自偏
采菊東籬下 悠然見南山
山氣日夕佳 飛鳥相與還
此中有真意 欲辨已忘言

議論の発端は、蘇東坡の次の文である。

采菊東籬下、悠然見南山、因採菊而見山、境與意會、此句最有妙處。
近歲俗本皆作望南山、則此一篇神氣都索然矣。

（蘇軾『東坡題跋』卷二「題淵明飲酒詩後」）

菊を採るついでに山を見る、という所に、境と意と渾然として会する妙処が有る、「望南山」では、詩全体の靈妙さが消える、と。

この論を更に詳しく伝えたのが、弟子の晁補之である。

東坡云、陶淵明意不在詩、詩以寄其意耳。采菊東籬下、悠然望南山、則既采菊又望山、意盡於此、無餘蘊矣、非淵明意也。采菊東籬下、悠然見南山、則本自采菊、適舉首而見之、故悠然忘情、趣閑而累遠、此未可於文字精粗間求之。

（晁補之『鷄肋集』卷三十三「題陶淵明詩後」）

「望南山」にすると、菊を採ったり山を望んだりする意になって、それきりで余韻などは漂わない、「見南山」にすると、菊を採るだけのこと、山を望む意はなく、首を挙げれば山が見えた、そこに物に捉われない悠然とした趣がある、という主旨である。

つまり、今の言葉で、「望」は恣意、「見」は非恣意、恣意が働いては味わいがなくなる、ということである。たしかに、一字の違いで詩の趣が大きく変わることが納得される。

この論は、東坡の存在の大いさも与って、千古の鉄案の如く後世に伝えられた。……中略……東坡の説を是として論を継ぐ者は絶えない。これに対して、非として駁する者は皆無と言つてよい。それほどに、この論の正統性は人々によって支持されている。

しかしながら、事「望」と「見」のテキスト上の当否については、別の角度から考える余地がある。すなわち、東坡の議論は納得されるとしても、果たして淵明自身はそこまで意図していたか、という問題が生ずる。まず、事実としてテキストを調べる。

結論から言うに、現存の『陶淵明集』は、橋川時雄氏の分類に従えば、元刊李公煥十卷本の系統を引く、万暦刊潘氏八卷本に、「見・作望」とあるのを除き、全て「見」となっている。つまり、「望」のテキストは見当らない。

ところが、この「飲酒」其五は、『文選』（卷三十）に「雜詩」として採録されているので、『文選』を検してみた結果、仿宋胡刻本、足利学校本（南宋紹興年間刊）の宋版の系統は全て「望」となっている。この結果から、「望」のテキストの方が原型ではないか、という疑いを生ずる。思うに、現存の陶集は全て南宋以後の版に出るので、東坡の卓説一度出で後の改定を経たものであろう。一方『文選』中の

二〇二一年度 早稲田大学大学院教育学研究科
修士課程 外国学生入学試験問題
【専門科目・共通】 【国語教育専攻】

陶詩は、一部に過ぎないため、そこまで手を加えることなく伝わった、と。厳密には更に多くの版本に当らなければならないが、大筋に於いてこの推論は誤りないと思う。決して、東坡の言うように、俗本が「望」になっている、ということではない。

「望南山」とすれば、どういう意味になるのか。それは成り立つのか。⁴合理的な解釈が出来なければ、テキストは古くても、誤り、としなければならない。そこで注目されるのが、この詩の二つ後にある「飲酒」其七に、

秋菊有佳色 裛露掇其英
汎此忘憂物 遠我遺世情 ……

と詠うことである。菊の花を摘んで酒（忘憂の物）に浮かべて飲む、という。そうすると、其の五の「菊を采る」のも、漠然と菊の花を採るのではなく、これを酒に浮かべて飲もうということが考えられる。其の七では、その酒を飲むことによって、俗世からいよいよ遠さかる気持ちになると詠う。……後略……

〔問一〕傍線1「山氣日夕佳……欲辨已忘言」の四句を現代日本語に訳しなさい。

〔問二〕傍線2「此未可於文字精粗問求之」とは、どういう意味か。簡潔に説明しなさい。

〔問三〕傍線3「決して……」ことではない」について、本文の内容に沿って分かりやすく説明しなさい。

〔問四〕傍線4「見」ではなく「望」であるべき「合理的解釈」について、あなたの考えを述べなさい。ちなみに「後略」部分には、陶淵明の時代に長寿のために菊酒を飲む風習があったこと、さらに遡って『詩経』にも「南山の寿」がすでに詠われていること等が記されている。

（以上）

二〇二一年度 早稲田大学大学院教育学研究科 修士課程 外国学生入学試験問題

「専門科目・共通」

【国語教育専攻】

【共通C】（これは研究指導に「石原千秋」を希望する受験生のための問題です。）

以下に示すのは太宰治『人間失格』（一九四八年）の「第一の手記」の冒頭です。これを読んで後の問いに答えなさい。

恥の多い生涯を送って来ました。

自分には、人間の生活というものが、見当つかないのです。自分は東北の田舎に生まれましたので、汽車をはじめ見たのは、よほど大きくなってからでした。自分は停車場のブリッジを、上って、降りて、そうしてそれが線路をまたぎ越えるために造られたものだという事には全然気づかず、ただそれは停車場の構内を外国の遊戯場みたいに、複雑に楽しく、ハイカラにするためにのみ、設備せられてあるものだとはかり思っていました。しかも、かなり永い間そう思っていたのです。ブリッジの上ったり降りたりは、自分にはむしろ、ずいぶん垢抜けのした遊戯で、それは鉄道のサーヴィスの中でも、最も気のきいたサーヴィスの一つだと思っていたのですが、のちにそれはただ旅客が線路をまたぎ越えるための頗る実利的な階段に過ぎないのを発見して、にわかに興が覚めました。

また、自分は子供の頃、絵本で地下鉄道というものを見て、これもやはり、実利的な必要から案出せられたものではなく、地上の車に乗るよりは、地下の車に乗ったほうが風がわりで面白い遊びだから、とばかり思っていました。

自分は子供の頃から病弱で、よく寝込みましたが、寝ながら、敷布、枕のカヴァ、掛蒲団のカヴァを、つくづく、つまらない装飾だと思い、それが案外に実用品だった事を、二十歳ちかくなつてわかつて、人間のつましさに暗然とし、悲しい思いをしました。

また、自分は、空腹という事を知りませんでした。いや、それは、自分が衣食住に困らない家に育ったという意味ではなく、そんな馬鹿な意味ではなく、自分には「空腹」という感覚はどんなものか、さっぱりわからなかったのです。へんな言いかもしれませんが、おなかが空いていても、自分でそれに気がつかないのです。小学校、中学校、自分が学校から帰つて来ると、周囲の人たちが、それ、おなかが空いたろう、自分たちにも覚えがある、学校から帰って来た時の空腹は全くひどいからな、甘納豆はどう？ カステラも、パンもあるよ、などと言つて騒ぎますので、自分は持ち前のおべっか精神を発揮して、おなかが空いた、と呟いて、甘納豆を十粒ばかり口にぽうり込むのですが、空腹感とは、どんなものか、ちつともわかつていやしなかったのです。自分だって、それは勿論、大いにものを食べますが、しかし、空腹感から、ものを食べた記憶は、ほとんどありません。めづらしいと思われたものを食べます。豪華と思われたものを食べます。また、よそへ行って出されたものも、無理をしてまで、たいてい食べます。そうして、子供の頃の自分にとって、最も苦痛な時刻は、実に、自分の家の食事の時間でした。

自分の田舎の家では、十人くらいの家族全部、めいめいのお膳を二列に向い合せて並べて、末っ子の自分は、もちろん一ばん下の座でしたが、その食事の部屋は薄暗く、昼ごはんの時など、十幾人の家族が、ただ黙々としてめしを食っている有様には、自分はいつも肌寒い思いをしました。それに田舎の昔気質の家でしたので、おかずも、たいていきまつていて、めづらしいもの、豪華なもの、そんなものは望むべくもなかったもので、いよいよ自分は食事の時刻を恐怖しました。自分はその薄暗い部屋の末席に、寒さにがたがた震える思いで口にごはんを少量ずつ運び、押し込み、人間は、どうして一日に三度々ごはんを食べるのだらう、実にみな厳肅な顔をして食べている、これも一種の儀式のようなもので、家族が日に三度々、時刻をきめて薄暗い部屋に集り、お膳を順序正しく並べ、食べたくななくても無言でごはんを噛みながら、うつむき、家中にうごめいている霊たちに祈るためのものかも知れない、とさえ考えた事があるくらいでした。

問一 「自分」は「人間の生活」を理解しているのか、いないのか。根拠をあげて説明しなさい。

問二 「自分」は、「自分」のどういうところが「人間失格」だといいたいのか。根拠を上げて説明しなさい。

二〇二一年度 早稲田大学大学院教育学研究科
修士課程 外国学生入学試験問題

「専門科目・共通」 【国語教育専攻】

【共通D】（五味淵典嗣）

○次に示すのは、佐多稲子『キヤラメル工場から』の一節である。一三歳の「ひろ子」は、家の事情で学校をやめて、キヤラメル工場で働いている。これを読んで、後の問いに答えなさい。

ひろ子は眉の間を吊りあげてやけに御飯をふうふう吹いていたが、やがて一膳終るとそそくさと立ち上がった。

「おや御飯は」

「おしまい」

ひろ子はもう火鉢の抽出しから電車賃を出していた。

「おしまいじゃないよ。もう一杯食べといで、まだ遅くなりやしないから。さあ」

「だって急いで食べられない」

祖母の手に茶碗を渡してやりながらひろ子は泣声を出した。

「急いで食べられないってお前こんな寒い日に熱い御飯でも食べなきゃこごえてしまうよ」

「だって遅くなると困るんですもの」

つい四、五日前に彼女は初めて遅刻した。だが彼女の工場には遅刻がなかった。工場の門限はきっちり七時であった。遅れた彼女はその日一日を否応なしに休ませられた。彼女達の僅かな日給では遅刻の分を引くのが面倒だったから。

その朝彼女は電車の中で遅れそうなことを感じた。身ぎれいな女などが乗り始めていて労働者風の姿が消えていた。彼女は車内の空気で時間を見ようとするように落ちつきなく目を走らせた。彼女はとうとう、入口まで出て行った。その時其処に吊り下がっていた割引の板札を、片手で胸から時計を引出した車掌がまくり上げてひっつけた。

あたりが、変わったように思われた。電車はひろ子が下りる停留所の一つ手前までもう来ていたのに、停留所のちょっと手前に電車道に沿うて、彼女の工場の赤煉瓦が長屋のように横につづいて、その中の一つに彼女の入口があった。ひろ子は見落すまいと、その一つ一つの入口を見つめた。押されるような何かかまわるような厭な腹痛を覚えた。

彼女は電車から入口へ駆けつけた。そして電車で見え通りだった。

彼女が家を出たのは暗い内だった。彼女の電車賃は家内中かき集めた銅貨だった。だが彼女の前には鋼鉄の鉄戸が一ぱいに下りていた。彼女は間に合わなかった。工場の門限は七時だ。彼女は、コソコソとそこを通りぬけた。彼女はマントの下で弁当箱を両手でしっかりと抱いてそれで胸の上をぐっと押さえて歩いた。彼女はベソをかいていた。人通りが多くなっていた。往來は彼女の朝から別の朝へ移っていた。

ひろ子はこごえるよりも遅刻がおそろしかった。

祖母に咎められながら朝飯をすませたひろ子は、襟巻に顔をうずめて、戦さに行くような気持で歩いて行った。外は研ぎ立ての庖丁のような夜明けの明かるさだ。そしてきしむように寒い。橋の上では朴歯が何度かすべった。

まだ電燈のついている電車は、印絆纏や菜葉服で一ぱいだった。皆寒さに抗うように赤い顔をしていた。味噌汁をかきこみざま飛んでくるので、電車の薄暗い電燈の下には彼らの台所の匂いさえするようであった。

ひろ子は大人達の足の間から割り込んだ。彼女も同じ労働者であった。か弱い小さな労働者、馬に食われる一本の草のような。

「感心だね、ねえちゃん。何処まで行くんだい」

席をあけてくれた小父さんが言葉かけた。

「お父ちゃんはどうしてんだい」

「仕事がないの」

ひろ子はそれを言うのが恥ずかしかった。

「おや、あそんでるのかい。そいつはたまらないな」

そう言って彼は親しげな顔付きをした。その車内では周囲の痛ましげな眼が一斉に彼女の姿にそがれはしなかった。彼らにとってはそれが自分たち自身のことであり、彼女の姿は彼らの子供達の姿であったから。

問一 傍線部「その車内では周囲の痛ましげな眼が一斉に彼女の姿にそがれはしなかった」とあるが、なぜか。その理由を説明しなさい。

問二 この部分からは、「ひろ子」のどんな境遇や心情が読み取れるだろうか。本文の表現を根拠にしながら、あなたの考えを書きなさい。